

布施の心

本多 克也
(講談社)

【山村(1)】

長崎新聞掲載／全3段(W378×H99)

「（）ん子はもう死ぬとほい」

原因不明の重病で数日前から床に臥していた私の耳に、どこからともなく叔母たちのヒソヒソ声が聞こえてきた。

「死なんうちの息子は死んど！」

いつもはおとなしい母が、強い口調で叔母たちに抗う声

が、虚な私にもハッキリ聞き取れた。そしてその声は、七十五年以上経つた今でも、耳に残って離れない。

高熱でうなされる私のそばで、ひたすら冷たい井戸水をたらいに汲み、手ぬぐいを冷やしては額にあててくれた。母は幾晩も寝ず看病をしてくれたのだ。その甲斐あって、九死に一生を得た。私が小学校一年生のときだつた。

小さい頃はとくに病気がちだつたが、一年生のときにはとくに長期休みが多かつた。一学期末、母が担任の先生から呼ばれた。

「この分だと、進級できんかもですね」

母は、先生の心配の言葉に抵抗して、

「先生、私が教えますけん、進級させてやつてください！」

と必死に頼み込んだ。

家業の酒屋は、母が実質上切り盛りしていた。酒の仕入れ、商品の陳列や帳面つけ、角打ち（立ち飲み）の客の相手、そして父や私たちの洗濯やご飯の世話などいつも時間に追われていた。そして、忙しい仕事の合間に縫つて、母は寸暇を惜しんで国語と算数を教えてくれた。女学校を出て多少学がある母の教えは、愛情も混ざつて、厳しいがよく頭に入つた。おかげで、何とか落第せずに済んだ。

進級の喜びも大きかつたが、それ以上に、私にとっては母との二人だけの時間が、数少ない、母に甘えられる楽しいひと

とじきだった。そして、周囲が敵ばかりの母にとっても、心を許せた安らぎの時間だつたかもしれない。

私、本多克也の故郷は、長崎県南高来郡山田村（現雲仙市吾妻町）だ。そこで一九三七年、生まれた。

山田村は、雲仙から有明海に向かって広がる平野で、私の住む栗林地区は少し山手のほうになる。

山田村を知る人は少ないが、長崎県が生んだ日本経済界の傑物のひとり、「旭化成工業のトップまでなつた宮崎輝（かがやき）」の生誕地と言えば、少しは関心を持つてもらえるかも知れない。

ところで、日本の著名な経済人の中で、長崎県ゆかりの人として、今は必ずしも山手のほうになる。

山田村を知る人は少ないが、長崎県が生んだ日本経済界の傑物のひとり、「旭化成工業のトップまでなつた宮崎輝（かがやき）」の生誕地と言えば、少しは関心を持つてもらえるかも知れない。

同郷の偉人宮崎輝さんは、後に詳しく触れるが、私の長い人生の道程で、いつも心の中に居続けた。

一九四三年頃から、私を親戚の茶園に養子に出す計画が父たちの間で燃つっていた。家計が厳しいので、次男をよそに出そうという、所謂「口減らし」だ。

母は、それにも必死に抵抗した。

茶園は、栗林地区よりもずっと山のほうにあり、辺鄙などころだつた。井戸を掘つても水が出ず、雨水を溜めて飲み水や風呂の水にしていた。電気も通じておらず、夜の明かりはランプだった。私も茶園に行つたときにはよくランプ磨きをさせられた。

雲仙市吾妻町にフッ素樹脂製品の自社製造工場を構える本多産業株式会社は、今年3月に設立50周年を迎える。雲仙市で生まれ育った創業者本多克也氏は高校卒業後、京大・社会人生活の中で化学の基礎を学び、挫折や出会いを通してやがて独立を志していく。本シリーズは化学者として粘り強く研究を重ねてきた本多氏の個人史と創業の記録を、徳永耕一氏（ジスコ不動産社長）による書き書きで描いていく。

（次回2月9日掲載予定）



母に抱かれた著者

2023年3月本多産業株式会社は
設立50周年を迎えます。

本多産業株式会社
【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814
TEL:045-869-1133
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677
TEL:0957-38-3520

文・徳永 耕一